

京都大学	博士（文学）	氏名	塚本秀樹
論文題目	形態論と統語論の相互作用—日本語と朝鮮語の対照言語学的研究—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、日本語と朝鮮語における形態論と統語論の関わりの実態を、対照言語学的アプローチにより解明することを目指したものである。本論文は全部で18の章（本編15章、付録3章）で構成されている。末尾には、言及された文献のリストとは別に、日本語と朝鮮語に関する対照言語学関係の主要文献（第2章で示される筆者の研究史概観と関連させて、1993年以前のものとは1994年以降のものに分けられている）、さらに博士学位論文のリストが付されている。以下、章ごとに概要をまとめる。</p> <p>第1章「序論」は、全体の導入部にあたるもので、本論文の背景と問題意識、目的、言語対照という研究手法、さらに本論文の構成が、この順に述べられている。</p> <p>第2章「これまでの日本語と朝鮮語の対照言語学的研究」では、日本語と朝鮮語に関する従来の対照言語学的研究が概観され、それらの問題点が指摘されるとともに、対照研究を表面レベルでの異同論に終わらせず、考察をさらに深化させていくための課題が論じられている。</p> <p>第3章「日本語における必須補語と副次補語」では、以降の考察の前提として日本語の補語が分析され、伝統的に副次補語とされてきたものの中に、必須補語とみなすべきものが含まれていると論じられている。それと同時に、必須補語と副次補語の区別基準として、従来から考えられていた1基準に3基準を加え、両者の区別を連続的に把握すべきという提案がなされている。</p> <p>第4章「日本語における格助詞の交替現象」も、第3章と同様、準備的な章である。ここでは、日本語における格助詞の交替現象が、単一格助詞どうしの交替と、単一格助詞と複合格助詞の交替の2つに大別できると指摘された上で、前者が16種類に分類され、詳細に記述されている。第3章で提案された3基準のうちの1つは、この章での格助詞の交替現象についての観察を下敷きにしたものとされている。</p> <p>第5章「日本語と朝鮮語における数量詞の遊離」では、数量詞の遊離現象が、日本語では5種類観察されるのに対して、朝鮮語では3種類しか観察されないと論じられている。また、朝鮮語における数量詞の遊離現象について、格形が同一でも文法関係の違いがある場合、それによって数量詞の遊離現象の自然さが変化するという旨の観察を通して、表層レベルでの格形のみによる先行研究の分析が批判的に検討されている。結果として支持されるのは、格形と文法関係の複眼的な観点からの分析であり、数量詞が文中のどこまで遊離できるかという問題についても、この複眼的な観点から説明が加えられている。</p>			

第6章「日本語における複合格助詞」では、日本語の複合格助詞に関して、形態的・統語的・意味的側面の3面から観察が加えられている。形態的側面については、連体表現が2種類あるという指摘がなされ、各々の種類ごとに、成立状況が述べられている。統語的側面については、単一格助詞との交替現象および動詞の結合価に関わる様態が記述されている。意味的側面については、動詞部分の意味の実質性に段階がある旨が論じられている。また、動詞部分の意味の実質性の高低という意味的側面と、動詞部分の漢字使用の頻度、および動詞部分の連体形の可能性という形態的側面との間に緊密な相関関係があるとされ、さらに、複合格助詞は、直前に現れる名詞類などの持つ特性が弱い場合においても、動詞部分の意味がその特性を補うことで使用可能になっていると論じられている。

第7章「日本語と朝鮮語における複合格助詞」は、第6章を前提とした章である。ここでも、日本語と朝鮮語における複合格助詞について、形態的側面と統語的側面、そして意味的側面の3面から観察がなされている。形態的側面については、2種類ある連体表現の1種である、動詞連体形による連体表現に目を向けた場合、日本語よりも朝鮮語の方が成立しやすい、と論じられている。また、統語的側面については、朝鮮語も日本語と同様に、いくつかの複合格助詞で表示された補語は常に副次補語となるわけではない、すなわち、述語動詞によっては、補語が副次補語ではなく必須補語となるという旨が述べられている。意味的側面については、動詞部分の実質的な意味を保持した複合格助詞が日本語より朝鮮語に多いことが、上述の形態的側面と相関する形で述べられている。

第8章「日本語における複合動詞」では、日本語の複合動詞について、形態的側面と統語的側面から光が当てられている。形態的側面については、複合動詞が、語彙的複合動詞（複合動詞を構成している前項に高独立性を示す様々な現象が生じない）と、統語的複合動詞（その前項に様々な高独立性の現象が生じ得る）の2種類に大別できると論じられている。統語的側面については、複合動詞自体の格支配と、複合動詞を構成している前項・後項それぞれの格支配との間に見られるパターンが6種類あるとされ、語彙的複合動詞における格支配は、前項・後項の両方、前項のみ、後項のみのいずれかによってなされているが、統語的複合動詞においては前項のみによるものだけであると論じられている。

第9章「日本語と朝鮮語における複合動詞」は、第8章を前提とした章である。ここでは、日本語と朝鮮語の間における複合動詞の様々な相違点が、動詞連用形に関する両言語の違いに還元できると論じられている。具体的には、詳細は第14章とされながらも、朝鮮語における動詞連用形が、基本的には節・文レベルで用いられるのに対して、日本語の動詞連用形は節・文レベルだけでなく語レベルにまで入り込んで用いられると述べられている。さらに、動詞連用形の直後の境界は、日本語の場合さほど

深いものではなく、日本語において、より深い境界をもたらす「動詞連用形＋接続語尾「て」」の形式が、境界の深さの点で、朝鮮語の「動詞連用形＋動詞」に匹敵すると論じられている。

第10章「膠着言語と統語構造」は、考察対象としてトルコ語が加えられ、日本語・朝鮮語・トルコ語という3つの膠着言語の対照が試みられた章である。膠着言語は形態上、同様に見えても、要素と要素が緩く結びついている日本語のような膠着言語もあれば、その結びつきが緊密な朝鮮語のような膠着言語もあるというのがここでの主張で、この結びつきの緊密さの程度が、文構造に影響していると論じられている。文という大きな要素は1つしか設定されない、単層的な統語構造をなしているのが朝鮮語であり、文の中に文が設定される複層的な統語構造をなしているのが日本語であるとされ、トルコ語は両言語の中間と位置付けられており、それぞれ、要素の結びつきの緊密さの程度と関連づけられている。また、これらの言語にそれぞれの統語構造を仮定する根拠としては、第12章の考察にもつながる、使役構文と複合動詞構文の分析が展開されている。

第11章「諸言語現象と文法化」では、日本語と朝鮮語における「複合格助詞」「複合動詞」「動詞連用形＋ていく/動詞連用形＋kata（行く）」構文と「動詞連用形＋てくる/動詞連用形＋ota（来る）」構文などの諸表現が取り上げられ、両言語の違いが文法化の進度の差として統一的に理解できると論じられている。これらの諸表現に関する文法化プロセスにおいて、日本語は朝鮮語よりも先のステージに到達しているというのがその結論である。

第12章「諸言語現象と形態・統語的仕組み」では、日本語と朝鮮語における諸表現、具体的には、「接辞を用いた使役構文」「複合動詞構文」「～中（に）/cwung(-ey)」「～後（に）/hwu(-ey)」が取り上げられ、これらの表現に関する両言語の違いは、両言語の形態・統語論の根本的な仕組みの違いに起因すると論じられている。具体的には、日本語では、語と文・節の融合が許容されるのに対して、朝鮮語ではそれが許容されず、この違いゆえに、諸表現の日朝差が生じるというのが、ここでの主張である。

第13章「品詞と言語現象のかかわり」では、日本語における、いわゆる形容動詞と、朝鮮語における形容詞の様態が観察され、両者の違いが、第11章で示された両言語の文法化の進度の違いと合致していると論じられている。さらに、日本語では、動作・行為や状態・性質を叙述するのに名詞述語を用いて表現できるのに対して、朝鮮語ではそれが困難であり、動詞あるいは形容詞を述語とした表現をとる必要があると述べられ、この差は、第12章で示された、両言語の形態・統語的仕組みの違いによるものであると論じられている。

第14章「文法体系における動詞連用形の位置づけ」では、動詞連用形が、朝鮮語よ

りも日本語において、広範囲に現れると論じられている。範囲の広さとは別に、文法的なレベルについても取り上げられており、朝鮮語における動詞連用形が、基本的には節・文レベルで用いられるのに対して、日本語における動詞連用形は、節・文レベルのみならず、語レベルでも用いられるという両言語の差が改めて取り上げられ、この違いもまた、第12章で示された、両言語の形態・統語的仕組みの違いによるものであると論じられている。

本編の最後に位置する第15章「結論」では、以上で展開された考察の結論がまとめられている。突き詰めていけば、日本語と朝鮮語の様々な違いを引き起こしている根本的な要因の違いとして、文法化の進度の違い、そして、形態・統語論的な仕組みの違いを挙げることができ、以上で観察された日本語と朝鮮語の言語差は、これら2点に由来すると考えられる、というのが結論である。

以上の本編の考察を補う補説として、第16章～第18章の3章が付されている。これらも、章ごとに概要をまとめる。

第16章「日朝対照研究と日本語教育」では、日本語における、過去を表す形式「た」、複文の接続形式、「動詞連用形+ていく」構文と「動詞連用形+てくる」構文」という、部分的に第11章と重なる諸現象が取り上げられ、それらに対応する朝鮮語の諸表現との対照を通して、両言語の異同が論じられている。もっとも、日本語の直観を持たない（朝鮮語母語話者だけでなく）他言語話者一般に対する日本語教育の文脈にあっては、両言語の相違点は優先されるべき教育項目ではなく、朝鮮語が他のどの言語よりも日本語と類似しているという大局的な視点を優先させるべきと論じられている。

第17章「朝鮮語における固有語動詞の受身文」では、朝鮮語における固有語動詞の受身文について、i形は形態上、派生を経ない純粋な他動詞の場合に用いられる一方で、cita形は、そうした純粋な他動詞であって対応するi形を持たない場合と、自動詞からの派生を経た他動詞の場合に用いられると論じられている。また、i形かcita形かといった形態上の相違が、3項動詞能動文から受身文への展開における制約や、動作主のマーカ、主格補語の意味特性、アスペクトといった統語的かつ意味的な側面に影響を及ぼしていると論じられている。

最後の第18章「朝鮮語における漢語動詞の受身文」では、朝鮮語における漢語動詞の受身文としては、受身表現の体系内に接尾辞toytaが用いられた文だけでなく、接尾辞pattaや接尾辞tanghataが用いられた文も認められるべきであると論じられている。さらに、接尾辞toyta・patta・tanghataが用いられた受身文は、それぞれ、中立・受益・被害を含意する性質のものであり、そうした意味的な特徴が主語の制約という別の意味的な側面、さらには動作主のマーカやアスペクトといった統語的な側面にも反映されていると論じられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本語と朝鮮語の対照研究に携わっている筆者が、自身の40年余りの研究成果をまとめたものである。

本論文の目的は、日本語と朝鮮語がさまざまな言語表現に関して見せる違いの原因を解明することにある。日本語と朝鮮語が膠着語という同じ言語タイプに属しており、さらにその中でも文法が特によく似通っているという、広く行きわたった認識からすると、本論文は、微視的な観察に基盤を置きながら言語の構造的な違いに迫ろうとする、一般言語学的に見ても興味深い試みと言える。

本論文は最終的に、2つの観点を提案している。2つの観点のうち1つは、「文法化の進度」という観点であり、もう1つは「形態・統語的仕組み」という観点である。日本語と朝鮮語はこれら2つの観点に関して大きく異なっており、さまざまな言語表現に関して両言語が見せる言語差は、それを反映したものだというのが、本論文の結論である。

ここで言う「文法化」とは、「実質的な意味を有する自律的な語彙項目がその実質的な意味と自律性を失い、文法的な機能を担うように変化する過程」である。

文法化という概念は、一般的には、個々の語句が歴史的に辿る言語変化のパターンとして理解されている。だが、筆者は文法化を、個々の語句ではなく、(i)複合格助詞、(ii)複合動詞、さらに(iii)「～していく」構文や「～してくる」構文とそれらの朝鮮語の対応構文という、幅広い語句をカバーするドメインに適用する。文法化の進度をはかるための種々のテストを導入した結果、両言語とも、これらのドメインには、共時的に文法化のさまざまな段階にある項目が含まれていることが示される。その上で、このドメインに属する語句が全体として、日本語の方が朝鮮語よりも先のステージにある、と論じている。

この分析の裏付けとなるのが、これらの語句に関する日朝両言語の相違であり、観察の結果は、すべて、この文法化の進度の日朝差として説明されている。たとえば、日本語には「～にあたり」「～について」という複合格助詞があるが、朝鮮語には対応する複合格助詞が見当たらないように、複合格助詞が朝鮮語よりも日本語に多く存在するという事は、「当たる」や「付く」などの動詞を含む表現の文法化が日本語で進んでいることの反映として説明されている。

2つの観点のうち、残る1つの観点、「形態・統語的仕組み」とは、形態論が律する語と、統語論が律する節や文が、別物として区別されるかどうか、という観点である。日本語では、語は節や文とあまりはっきりとは区別されないが、朝鮮語では語が節や文とは明確に区別される。これは、日本語では形態論と統語論が融合しやすいが、朝鮮語では形態論と統語論は融合しにくいということでもある。さらに、この観点は、文構造にも影響しているとされている。たとえば「本を読み続ける」という複合動詞構文が、「本を読む」という文の意味内容を「続ける」ことを意味するにもかかわらず、日本語の文「本を読み続ける」においては「読み続ける」が一語をなす。

このように、文の複層的な統語構造が形態構造と食い違うことは日本語では珍しくない。これと対照的に、統語論の最大出力である文が1つしか設定されず、文が単層的な統語構造をなしているのが朝鮮語であり、同様の意味を朝鮮語では「本を継続（して）読む」と、副詞成分を伴う形で表現する。ここには複合動詞化の形態プロセスは認められない。複合動詞構文だけではなく、使役構文についても同様の分析が展開されている。日本語ではたとえば、文「先生は学生に一所懸命に本を読ませた」は、「一所懸命に」が上位の文「先生は学生に～させた」にかかるとも、下位の文「学生が本を読む」にかかるとも解釈できる、つまり一所懸命なのは先生であるとも、学生であるとも解釈できる。それに対して、朝鮮語では文の中に文はなく、単層的な文構造であるため、一所懸命なのは先生であるとしか解釈できない。

以上の2つの観点どうしが、どのような関係にあるのかという根本的な問題については、筆者の検討が現在なお続いているところである。しかしながら、個々の表現に対する筆者の地道な観察記述の成果がすでに膨大なものにのぼっていることは動かしがたい事実である。

一般的に文法化の進度が言語を特徴づけることがありうるのか、本論文の主張に異論をはさむ余地はある。しかし、調査対象の範囲内では成立する議論であり、記述的な価値は高い。諸表現の成立の歴史的な経緯にも示唆を与えているところがある。

40年余りの研究の蓄積が下敷きにされているだけに、本論文の中には、時代を感じさせる箇所もないわけではない。しかし、それらの箇所においてさえも、筆者の観察それ自体は堅実で揺るがず、時代を超えた価値を有する。

その一例は、上に述べた単層構造・複層構造の部分に見出すことができる。本論文の中で単層構造・複層構造は、1970年代のチョムスキー言語学流の樹形図で表示され、「基底レベル」という、やはり初期のチョムスキー言語学を思わせる用語も散見される。それだけを見るならば、本論文で述べられていることは、チョムスキー言語学が1970年代の段階から大きな変貌を遂げた現代において、もはや有効性を失っているかに思えるかもしれない。

しかし、この部分は、考察対象としてトルコ語が加えられ、トルコ語が日本語と朝鮮語の中間と位置付けられている箇所でもある。このことから考えられるのは、本論文の「単層構造」「複層構造」とは、そもそも離散的なものではなく、連続的なものであったということである。筆者の文構造観は当初から柔軟なものであって、当時のチョムスキー言語学流の表示はあくまで便宜上のものに過ぎない。つまり本研究にとってアップデートは必須のものではないと考えられる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年2月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお本論文は京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当分の間、当該論文の全文に代えて内容を要約したものとすることを認める。